過去，現在，将来

安　成弘（東京大学）

年月の経過は，はやいもので，Σ委員会が発足してから，4年を数えようとしている。その発足に当っては，日本原子力産業会議の会議室で，杉本朝雄先生も出席され，熱心に議論が行なわれたことは，今も，私の頭に明らかに浮んでくる。その後，日本の原子力界には，色々と多くの事があった。Σ委員会の歩いた道も，決して平担なものではなかったと思う。私も，委員会発足後，1年余りして，日本を離れた。併し，とにかく，委員会が，今日迄相当の成果をあげてきたのは，多くの人々の，文字通り貴重な御努力によっている。

日本が，原子力研究をスタートしてから，約１０年を経過している今日，日本の原子力界は，一つの新しい段階に突入したと思う。世界的にみて，原子力発電計画は，着実に増大して行く様に見える。わが国においても，電力会社の原子力発電所建設は，着々と実現される段階となった。一方動力炉開発の為の議論が盛んに行なわれてきたが，このための新法人の設置が認められた。この様な情勢下で，日本原子力研究所においても，メーカーや電力会社，又，大学においても，そのあり方は，以前より，より切実に考えられている。

私の様に，大学に勤めている人には，やはり，原子力の基礎研究と原子力開発との関連の問題は重要かつ切実な問題の一つである。Σに関する研究活動の問題も，やはり，これに関連した問題であろう。日本が，本当に，動力炉開発を，自主的に行うと決心したのであれば，開発に関連した基礎研究を，なおざりにしては，所期の目的を達成するのは困難であろう。Σに関する問題は，原子力開発に関して，基礎的なものの一つであると共に，極めて重要なものの一つである。併し，何れの場合もそうであるが，実現化は，資金，組織，人員，等に強く依存する。Σに関する活動も勿論そうである。従って，日本全体として，原子力開発に関連して，Σに関する活動は，いかにあるべきか，とゆうことを，より切実に考えるべき，重要な時点に，さしかゝっていると思う。又，この際，Σに関する活動についての，正当なＰＲが，十分行なわれることが，必要ではないだろうか。

原子力の様な，新しい分野の研究開発には，従来の常識や慣例にとらわれず，科学的な判断の上に立って決断，実行することが，重要なことであろう。これは，私自身に対する自戒の言葉でもある。